



大学教職への転身

昭和大学薬学部の加藤大先生からバトンを受けました。星薬科大学薬学部の穂山浩と申します。私は大学院修士時から約28年間勤めた職場で厚生労働省の試験研究機関である国立医薬品食品衛生研究所（国立衛研）を昨年の2021年3月に早期退職し、翌4月から星薬科大学薬学部薬品分析化学研究室の教授として着任しております。約30年前の古い分析機器と予算の少なさに驚愕しながら、30～40人の学生の卒論研究、社会人博士課程指導に追いまわられて悪戦苦闘している最中であり（2022年3月18日現在）。

しかしながら着任時に多くの方に教授就任のお祝いのお言葉とともに共通して問われるのは、「なぜ国立衛研の部長職を定年前に辞めてから大学の教授職に移ったのか」であります。その質問に一瞬戸惑いますが「教職をやりたいから」と当たり前のように答えております。世間的には前職の方がよく感じるのでしょうか。確かに国立衛研では、予算、機器の設備、人材も充実しておりました。本音は自分でも明確な理由で答えられなく恥ずかしいですが、自然とBon Jovi（アメリカ合衆国出身のロックバンド）のIt's My Life (<https://www.youtube.com/watch?v=vx2u5Uu3DE>)の曲が頭の中で聞こえてきて、スムーズではなかったのですが、誰かに導かれたような感じで大学に移ったように感じております。現在、研究予算の申請と分析機器をできるだけ最新にするように努めていますが、このコロナ禍のご時世のため予算獲得は難しい状況であります。しかしながら、昨年着任してから星薬科大学の先生方に歓迎していただき、すべての経験が新鮮で非常に楽しく幸せを感じております。

本学の創立者・星一先生（図1）は、明治6（1873）年に福島県に生まれ、苦学して東京商業学校を卒業し、飛行機もない時代に20歳で自由の地アメリカへ渡り、コロンビア大学で経済学と統計学を修めております。滞米期間中に薬局で薬を買うことによって病気を軽いうちに治す習慣を身につけた星先生は、帰国後、社会奉仕可能な事業として製薬を始めることを決意し、“イヒチオール”という湿布薬を販売しています。この薬の爆発的な人気と収益を基に、明治44（1911）年、星製薬株式会社を創立、医薬品の創製、生産、供給、管理を担える人材を育成するための教育部門を社内に設置したことが本学の前身であります。星一先生は明治・大正・昭和の77年間、波乱万丈の生涯をおくられたようですが、前職の国立衛研の第5代所長で、副総理や内務大臣等を務めた後藤新平先生との親交があったようです。星薬科大学と国立衛研との縁も感じていま



図1 創立者 星一先生の銅像

す。またSF作家で有名な星新一先生は星一先生のご息息であります。

星薬科大学は、国内の私立薬科大学の中でトップレベルの研究、教育の実績と伝統を有する大学で、我が国の薬学高等教育と学術研究に貢献し、多くの人材を病院、薬局、製薬業界等へ輩出しています。星薬科大学の教育理念は創立者の星一先生の建学の精神を継承し、「一人に人、二人に人、三人に人、万事人なり。」と人材の育成が大切であると、「本学は、薬学を通じて、世界に奉仕する人材育成の揺籃（ゆりかごのこと）である。」「親切第一」と定めています。

星薬科大学は、薬剤師国家試験受験資格を取得できる6年制の薬学科と、創薬科学の研究者、開発者を目指す4年制の創薬科学科があります。各科の考え方や進路の違いはありますが、薬学の発展に貢献する優秀な人材を育成するための研究・教育を行っています。本学は東京都品川区にあり、官公庁や目黒、五反田、品川へのアクセスも良好です。緑に囲まれたキャンパスには、教育・研究施設以外にも薬用植物園や、体育館、テニスコート、プール等があり、薬学を学び研究できる環境に恵まれています。

私の担当する薬品分析化学研究室（図2）は、4月から新3年生が配属され、私と伊藤里恵講師の2人の教員、38人の卒論生と大学院修士課程の学生（1人）、社会人大学院博士課程（4人）、大学院専攻生（1人）、非常勤事務員（1人）の総勢47人で構成されています。本学の教育理念「親切第一」をモットーにして、薬学に関する知識、技術を応用し研究し、医療、福祉、食品衛生、環境衛生の向上に寄与するとともに、文化の創造と発展に貢献することをミッションとしております。薬学において分析化学の課題はなにか、患者さんのために自分にできることは何かと常に考える姿勢を持たせたいと考えています。研究成果を社会に還元するために意欲ある学生には積極的に学会や専門誌に発表させたいと思っております。卒業生には病院や薬局薬剤師、企業、官公庁等で幅広く活躍してくれることを望んでおります。さて、次にバトンをお渡しするのは日本大学薬学部の四宮一総先生です。四宮先生は我が国の高速向流クロマトグラフィーの第一人者でもあり、当学会でも以前に「ぶんせき」の編集副委員長としてご尽力されておりました。教育面では大先輩であり、薬学における分析化学の教育でご指導いただいております。それでは四宮先生よろしくお願ひします。



図2 薬品分析化学研究室（6F）がある新館

〔星薬科大学薬学部 穂山 浩〕